

天声人語

死の床で妹がせがむ。「あめゆじゅとてちてけんじや」。雨雪（みぞれ）取つて来て。兄は「おらおらでしとりえぐも」（原文はローマ字）。私は私でひとり逝くから▼切なくも忘れがたい一節を題に掲げた小説『おらおらでひとりいぐも』が芥川賞に輝いた。作者若竹千佐子さんは賢治と同じ岩手県出身。豊饒な東北言葉を駆使し、孤独を生きる女性を描いた▼主人公の桃子さんは74歳。東北から身一つで上野駅に降り立つて半世紀。そば屋や割烹で働き、同郷の男性と結ばれ、2子を育て上げる。だが夫が急逝し、愛犬を失う。子どもとも隔たり、孤独との対峙が始まる▼「人の心は一筋縄ではいがねのす」。飼いならしたつもりでも、孤独は時に暴れ出す。深まりゆく老い。かと思うと日常を穏やかに慈しむ時もある。沈む日は沼のごとく、晴れの日は天高く。ページを繰り、70代の心の揺れに引きこまれた▼若竹さんが文学に打ち込んだのは夫と死別した55歳から。テーマは貫して晩年を生きる哲学という。人生を四季にたとえて青春、朱夏、白秋、玄冬と言うが、若竹さんは自身の作品世界を青春小説ならぬ「玄冬小説」と呼ぶ▼人生100年時代、老後の不安は尽きない。20年後には全世帯の4割が独居になるとの予測もある。健康や家計と並んで備えておきたいのは、孤独の飼いならし方、老境の慈しみ方ではないか。「玄冬小説」の広がりに期待したい。

2018・1・18